

Global Research  
May 11, 2023

## Time for Arabs to Come Together and Rethink Strategic Alliances

### 今こそアラブ人は団結し、戦略的関係を再構築しよう

<https://www.globalresearch.ca/time-arabs-come-together-rethink-strategic-alliances/5819036>

By Michael Jansen

#### サルマンの平手打ち

アラブ連盟外相会議 ( the Arab League foreign ministers' congress ) が 12 年間のシリアの権利停止を解消することを決めたのは、ジェイク・サリバン米国家安全保障顧問がリヤドでサウジのサルマン国王およびムハンマド・ビン・サルマン皇太子と話し合っていた、まさにそのときだった。

シリアの連盟復帰は何カ月も前から取りざたされていた。ジョー・バイデン大統領と米高官は、シリアの復帰に繰り返し拒否の意思を表明していた。

いっぽうサウジ首脳らは、19日にリヤドで開催されるアラブ首脳会議の前にこの目的を達成しようとしていた。

つまり、この動きはサウジアラビアと王族によるバイデンへの平手打ちに他ならない。

サリバンはリヤドで、イエメンの平和構築やスーダンの紛争とともに、シリアの正常化について議論することになっていた。実際のところ、シリアはあまり注目されなかったようだ。

ホワイトハウスが発表した会談の概要では、サウジがスーダンから米国人を避難させたこと、イエメンの停戦に言及されていた。

主要な話題は、湾岸機構加盟国とインドとを大規模なインフラプロジェクトで結ぶ取り組みであった。それは相互の貿易を促進するため、海運とネットワーク整備に向けられていた。

もちろん、この取り組みは中国の「一帯一路」プロジェクトに挑戦するものである。

#### イスラエル第一戦略は変わらず

サリバンはサウジアラビアに飛ぶ前に、米国で最も強力なイスラエルのロビー組織である米国イスラエル公共問題委員会 ( AIPAC ) を訪問した。そして

AIPACの研究機関であるワシントン近東政策研究所で、外交政策に関する重要な講演を行った。

この講演でサリヴァンは、バイデンが「この瞬間をとらえ、ルールを定め、戦略を立て、我々の世界の価値と規範を前進させようとしている」と語った。

「我々は力を背景に中東に関与するつもりである。内外の圧力や暴力にもかかわらず、中東地域に対するバイデンの姿勢は揺るぎない」

彼は、レバノン・イスラエルの海上国境画定、「テロリスト」の殺害、疎遠な地域大国間の和解の仲介、イスラエルの地域統合の推進など、米国の功績を列挙した。

もちろん、「米国の価値観」や「国連憲章を遵守する各国の義務」についても語っている。

### 「米国の価値観」という皮肉

サリバンの「米国の価値観」という言葉は米国にとって痛烈な皮肉だ。

アメリカはこの地域で一度だけ、「価値観」に沿って行動したことがある。

それは1919年、キング＝クレーン調査団の報告書を棚上げにしたときである。

この報告書は、旧オスマン帝国の支配地域の帰属をめぐる調査の結果、アラブ市民の要求に耳を傾け、彼らに独立を認めるよう世界の列強に求めたものである。

事態は報告書の提起とは逆の方向に動いた。フランスとイギリスがトルコの支配地をシリア、レバノン、ヨルダン、イラク、パレスチナに分割した。そのときアメリカは何もしなかった。

イギリスがパレスチナをシオニストの植民地主義者に引き渡し、1948年と1967年の戦争でシオニストが全面占領したときも、アメリカは何もしなかった。

イスラエルは、エジプトとレバントの間の陸橋を切断し、米国の妨害や反対を受けることなく、アラブ人に対してほぼ絶え間ない戦争を仕掛け続けた。

アメリカが価値観や国連憲章を尊重したのは、ただ一度だけ。それは1956年、当時のアイゼンハワー大統領が、イスラエル、イギリス、フランスの三国によるエジプト攻撃を受けて、イスラエルにエジプトのシナイ半島からの撤退を命じた時のみである。

サリバンは今回のリヤド訪問で、ホワイトハウスの地域調整官ブレット・マクガークとエネルギー顧問アモス・ホクスタインを同行した。(ともに米国とイスラエルの二重国籍者)

彼らはすぐリヤドからイスラエルに移動し、ネタニヤフら政府関係者にブリーフィングを行った、

それはバイデン政権がイスラエルに全面的に肩入れし、サウジアラビアへの説明を軽視していることを示すものだ。

アラブ諸国は一丸となることを迫られている。そしてワシントンの利益を優先するのではなく、自分たちの利益を確保することを目的として、戦略的同盟関係を見直すべきだ。

アメリカの政治家は、議会でもホワイトハウスでも、イスラエル絡みの政策についてはつねに、超党派の支持を得ている。このため、彼らの政策はイスラエルの利益と常に一致する。

### イスラエルに屈したバイデン

大統領になる前、バイデンはドナルド・トランプ政権が行った破壊的な政策を覆すことを約束していた。

イランの核開発計画を制限する 2015 年の協定に再参加することを約束した。米国とパレスチナ人の関係を回復し、ワシントンのパレスチナ公館とイスラエルが占領する東エルサレムの米国領事館を再開すると言った。

しかし、彼はこれらの公約をすべて反故にし、イスラエルの命令に屈服してしまった。

さらに、中国の影響力拡大に対抗するため東に軸足を移し、戦略的な西アジアを無視してきたのである。

サリバンのリヤド訪問は、バイデンがこの地域に関心をまだ持っていることを示すだけのものである。

アラブ諸国は、米国の世界覇権から多極化への転換を図っている。米国との緩やかな関係を維持しながらも、ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ (BRICS グループ) に接近している。

中国が提唱する上海協力機構 (SCO) とも連携している。SCO の対話パートナーとなったアラブ諸国には、エジプト、クウェート、カタール、サウジアラビア、アラブ首長国連邦がある。

ワシントンの最も古い地域の同盟国であるサウジアラビアは、石油輸出国機構 (OPEC) の枠組みを拡大した。そして米国のライバルであるロシアを

「エネルギー戦線」(OPEC+)の主役に加えた。

### シリアのアラブ復帰は米国の焦りを生んでいる

昨年秋、米国の中間議会選挙を前にしたバイデンは、米国のガソリン価格を下げるために供給を増やすようにと要請した。OPEC+は石油輸出の削減でこれに応えた。

これは、バイデンにとって最初の平手打ちとなった。バイデンはすぐにリヤドに金を払うと宣言したが、すぐに考えを改めた。かれはサウジアラビアとの関係復活のために、サウジアラビアに取り入ろうとした。

この努力によってサリバンの訪問が実現した。

さらに、バイデンの強い反対にもかかわらず、今回アラブがシリアのアラブ復帰を歓迎したことが、米国の焦りを生んでいる。こうして来月、プリンケン米 국무長官がリヤドへの道を歩み出すことになった。

アラブの有力な政府は、アラブの利益になる問題では米国と協力する用意がある。なによりも自国の国益、そしておそらくはアラブの利益を優先させる方向を示している。

今後、中国、ロシア、第三世界の国々は、対米一辺倒ではなく、バランスと選択の自由を提供できるであろう。